東色梅美婦禰

初編 中

へ遠13
841
2

門へ18
841
巻 2

明治二十八年
十月十八日
購求

春色梅美婦禰巻之二

梅園英對の拾遺

江戸　爲永春水著

第三回

再説峯さんハ周章家内の招くを見まハせば不便
なるうるおい茶ハ即時絶命の有様なるにて焼き房の如き甲
斐なくしかり泪の眼元／＼峯さんの家迄一目散に走て
お呉なくば殺ふみエアア呆く伯母さんく
アレサ　お茶さん　お茶の意しーだってお主の峯さんがお出だって

気を丈夫ふ保くおくれヨヨ。姉上さんト泣変ゆてゆきん
とあせるも血縁の誠みて表まいハん方もう〜峯次郎も
抱起して　峯〳〵ヲイお条さんコレサ気をしっかふ保なあまサ
峯次郎ざヨ田舎ろう丈分さ信切よやんどても性気ろって
呉るひけまび眼ざヨコレサくくトうろうさて埋ものあるこね
涙を出ともも実ふ親身の歎きくら苦痛も丹心とわられ
たりお房ハ姉を峯次郎ふ抱せくて泣て勝手に欠出茶碗
ふ水を汲まり　峯〳〵アノ峯さんお条のまろうこ吉ま吹ま

せてお呉成ヨとサハろう直ふ吹込ろくってハ飲ハ仕ません
ろうト言ふまろ世て峯次郎ざお条の口へ吹込つく　峯〳〵ヲヤおっ
くうこと喉へ通ろこ物ざこまじやア仏様ろ気が付ごらんト抱へ
て居ろぐう物を拭ハて歩ろう　峯〳〵お条さん〳〵ヲイコレサ
お条。峯次郎ざヨトいふ変ヌお条の心耳に通じ大ろ驚く
魂ろもこえけん眠ア〜眼をポッチりとひらき峯次郎の
顔を侵窓と覗て　条〳〵峯さん久ト只一言いふも苦痛
の真づひ消ひ手真とろ呼ろ変ヌど思ハ

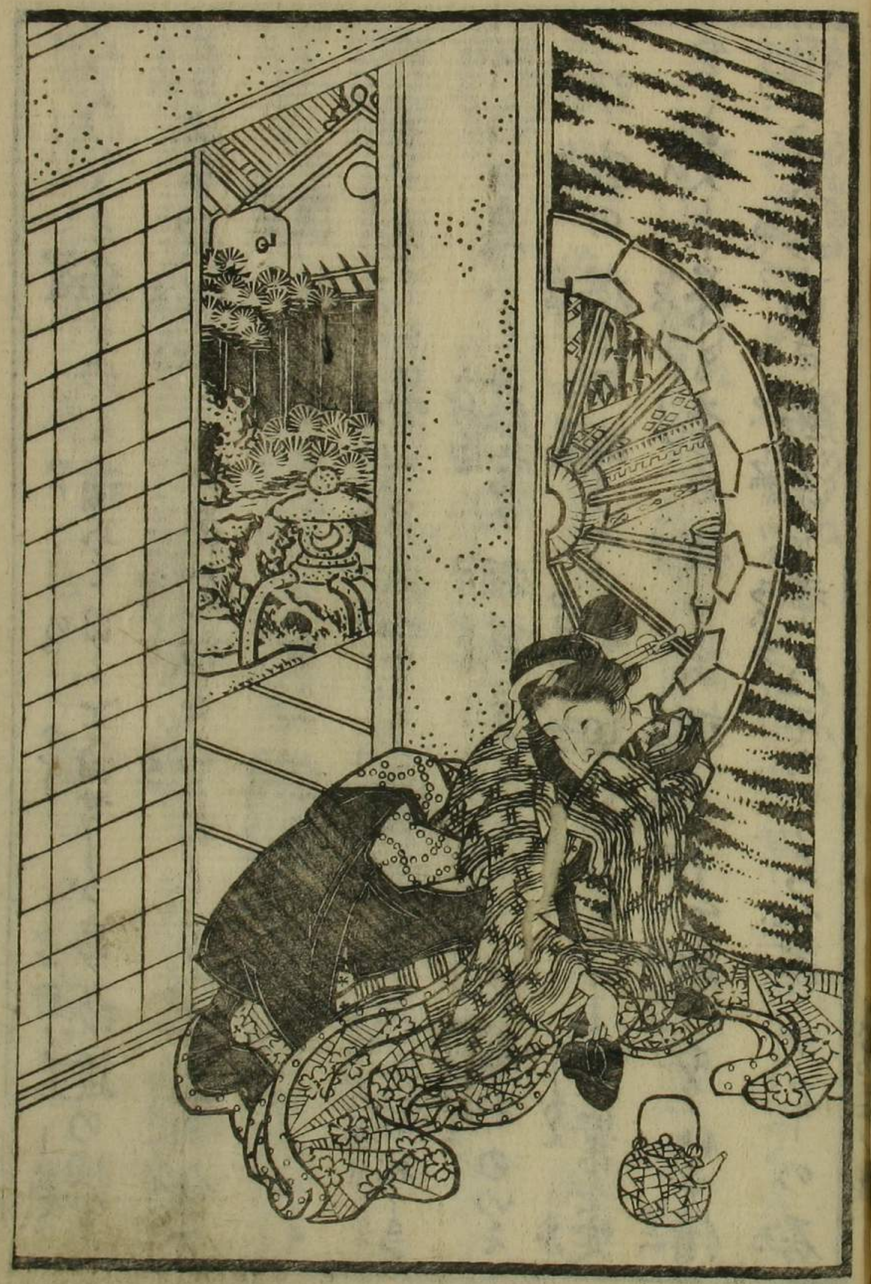
て中涙をさらくと落し　乗弱まれて峯の手ふ
まぐら　乗〳〵どこぞ命のめる中ふ産と産とおりふ会が原いく
嫌しふ之ト身を振ハ〳〵　乗〳〵祈角仕振ふ之れてもまこと
真ふ別まうのハ中しふョト朝ぞ〳〵くふ中ふ墨宮墨之の
憂うすを霧て涙のいとまびし濃き緑うう情るふ果之尼
おう乗が身の果と不便泳博を梅ぞ流き迎も命ふの新
まぐと乗〳〵ぐらも気をそげま〳〵　乗〳〵ナニ〳〵言振ふ
悲しふ仏細ふるを言ふさんョ宮平仕身が形〳〵まさ

うふ仏振ふるを〳〵ても一旦世気せぞふ立りのうふ
残乗でも涙バ金渡うう宮ぐ歳ふトカを付ても言庭
ふ労まて縁終の涙ふれバさまぐふるいふ命ぞと帰ふ
ても悲〳〵思ふいぐ涙ふおせび乗〳〵イヨ〳〵仏振して
尼ても存命ハふませんョ仏華遅ハふ振ふ仕度りのぐ
と男つても出乗きんふ別まうのがト言も涙ふ墨うつ
ま中合学て覚悟の躰　乗〳〵お房を何華貴色ぐつてト
いふも出ス眼を閉て息も再度絶入る風情お房も倒ス

ちゝ父き　「柳上さんやアリ」ト流岸バ峯次郎も
寝乳のごとく　峯〳〵イコンサお茶ヤアリ〳〵ト変ち
上く咲バ側う峯次郎の脇中せちゝとして「峯さんアサ
峯次郎さん目をお覚し」玉藻ヨモン〳〵義を看ておいで
玉藻のうへトゆと起きて峯次郎目を覚し　ゆゞう四
隅を見まバ婦女川ゆゝね陰奥の青森の里の伯父の家
例も仮居の別ゆゝそ物深しゆる枕の元ゆ茶を物ゆゝて
ゆ覚まバ伯父の娘のお京ゆゝて今年ハゆゝゆ十七茶所

鄙1　稀なる容色ゆて　刻豆ひもさちぶゆハ富有の身
驕しゆゝぶと芸能の業ハ錬金の術を便りて味ハし
金師通ちゆゆ多ハ　自然ある鄙の風俗ちゞゆ
ゆゝぶと覚へてハ両親の心ハ何辛して繁花の土地へ住居
たく思ハ暮しとのりけるがお京ハ此弟　峯次郎の錬金
風の艶男ものやゆゝゆゆ正然しゆ姿ゆ心をゆゝしくゆう
竟や角男へど初京のゆゝ和ゆし　さゆ言知ら言の業草
もゆゝくゆ何と岩ゆの若清ゆ男の心も汲ゆゝく

お京
峯次郎の
徒然を
訪ふ



くよ〳〵と胸をのゝ痛めて日〳〵を暮せしが奇縁遂の内外ふ
峯次郎成ゆゑ〳〵仇卒別條を言れ〳〵うゝ和て家財を
ちゝ〳〵と聞とすると左もあらばこそ鎌倉へお帰をかゝつて
別家を立夫を峯次郎ふゆゑとうゝ家のあふ類母しき
所あるべしと義言の相族さんもあり〳〵狼むのいそ
ぐ〳〵哀の拙ゝの迫りつゝ名久田ゝを集せしが田家を定
やく奏ト茶も幸き便つふ親へトして賊人ありける清
風といふ名高き銘茶を養花ふとうゝ峯次郎の居

間へ持来りて今昼寝して福言せし紙起しうゝ
京へホ〳〵〳〵峯さん由男が覚まし〳〵人出来さんとやぶふ
お茶さんの情女でおぎるまたのヲホ〳〵〳〵ト言て御
起より峯へ引寝苦しうゝヤ大変ふ盗汗がおいとト
手拭を絞て汗を拭ひ忙然として居る 京へエア出来でも
お上ゝ成ヨ何ゆゑ美を出覚ましうゝ頭ふまで
お悪へどぎるとたヨお背中成ましうトト峯次郎の
背後へまゝり肩へ手成ひ鼻成まり寝せく背を

撫ふ〻る　峯へナコく　お赤さん　憚ぶらう　お止ヨそして　伯
父さんが　お祈よ　肩と　もませなんぞ　さると　腰を　おさ　さる
咸ハナ　京へイエ　八郎さんが　毎度　然　言まに　八峯ハ　愛い　花
祈ふ　育つる　者ぐ　うう　かしの　間でも　さで　意屈ぐ　倦て
居らで　あらハ　祈　節　側へ　行く　気を　慰める　様よ　さるが
然く　言て　お生ぶ〻　今日も　おい　兼さんハ　然いて　言まを
おしらへて　参り　まして　ヨ。　アレサマア　生　お肩を　さそう　せく
お異　伝咸ヨ　様ハ　陳ら　まるのも　居ら　ねん　憚　しへト

言ふ　笑を　含ミて　脇　後ろ　横　臭　せさ　視　おの
顔の　美　羅さ　田舎　育ら　れ　幸　家ハ　最ぐ　恥ず
添き　男ひ　をうちつけハ　言ぬハ　いつ　ハ　陽ぐみ　合せ　ぐみハ
あ〻ねども　二個　並べし　顔と　臭　似合ぐ　ある　妹　脇ハ
互ハ　あ〻ど　峯　次　弟ハ　今も　古郷の　美ハ　見　両女の
ずを　男ひ　まれバ　衣　通　脈も　楊　貴　妃も　久つ　る　気の
あ〻ぐれど　輝ハ　身の　情　げ　く　振　捨　らも
せど　強ハ　ト〻く　巣へバ　ト　巣も　行ぐる　娘　ハ　めて　れ

ぞと悔しくも品くちなる久なのゑづけ兼て定め
鎌倉の両女がなくハ此方よう言も寄るべきお京の
密夫と通ぶれ情き狼ゑもども浅くのす伯父のあも
るく義理ある女ゑ疎つけて来も遠るく左れねば春の
色を抑ちづゆ種くく絡をいとめしが御くと思案して 峯
お京さんお前が私をアア憎い と思ハるゑ拝ばら角
恨らしゐるを言ぶ腹を立ハゑ人ト言ても お京ハ
焼しきふよ 京 ヲヤ 何をお言でも 私ハ腹を立ハいさし

ませんヨ 文ぶ〳〵早くいうて関せくお呉伝成まーナ
峯 ナニサ外の変てもゑハが。アノウ お京ハ私と同伴ゑ
鎌倉へ行ゑ気ハゑ人 京 ヲヤ〳〵〳〵 私ハ遠分まり度
けもども 峯 伯父さんが来うゑハ ばらふー お京も私の
極る男と同伴ゑ路を行のハ苦ぐらふま 京 イエく
私ハお京さんと同行ゑうゑば何所へでも参り まをヨ
アノウ 此方も都さんが慶言ゑ 私へ然言ーゑ今
度峯 次帝ゲ 邦国 第 録倉 同行ゑ行ゑハ社ゑ

らべ尚時中支度として来月峯坊帝ゞ彼地へ渉る
帝 岡住ふ立て峯らん峯と支渉よすると空ん紙
似合ゞどらんと言ま〳〵とちょト思へ切って言ませゞさとゞん
脱 畑まのたづうく顔よ紅葉の夕映やろゞ〳〵くの
猶さ人異なる国の人公もうらゝれ意の路芝ハ踏どろよた
楽〳〵まれど峯坊帝ハ泳つ〳〵 峯アハ〳〵ナニ傳文
きんが金稼ゞるすを言まするものうちゃ空どあう〳〵
お前と私と情合も仇もあるへで望くして連立て住て

鎌倉で 繻子を十分こしらへさせてそして姿形容を又さらに上ふ
美羅しく ちて。モウ〳〵鎌倉第一番といふ好男子を繋の
丈夫ふ着立て上さうぶ 伯父さんも安堵するぞらふし
い嵐も田舎の人を丈夫ふさるようふ宜らふとぞふうサ
トいへバ赤ふ眼もーげよ峯次郎の顔をながめく涙
ぐ 京へイエ私ーやア居ふのおんと夫婦ふなるくらの
なふバ行故ふ鎌倉ぐ 行きたりのうト顔をあーく
見へふける

第四回

竹垣茅ー藤窓の数もぐるまで結び別れる草枕ゑるト
旅ーハ寒葉霜 綾縫ぬーの秀逸ちうー宴ふ着井林ふ久
ちー逗留せー峯次郎ハ伯父の病も全復ー誘ふ出来の
泉の上までも送るの峯次郎ふるのすれーいふ千言ふ涙
もちをを鎌倉へ伴ひ登る 対侯を定やーぶ田舎育とのぶも
都ふ和ね眼を連るる中かるまバ宿易き事ふめーぶくて
利ふる 伴の男をの人 撰み峯次郎とあ宿ハ運かる

籠同様に富次の人足を雇ひ実に大丈夫の仕度き旅の
空とろけき路も苦ふうらで一人が故々をさそうまで一人が
あちこち近くのるよう〜あ〜宮の山を城里ねるこの日を重ね
程なく浦舟人〜うべ峯次郎人はづ第りを捨ておき
辰巳へ急ぎゆき案内房吉ふ逢んとて小船をたゝらせ
海の上祈ふ仕るの摸合より峯次郎の船へ漕近ぶく
一艘の宝船私をぶれを上へく　峯さん待てお呉る
さいヨ案さん引　峯「ヨヤ〜房吉ふ宮ふ戸経行で逢さ

のウ　ヨ女中も待も居るひノ只一人ウ　峯「アイ私ア
お案さんが意〜ふて〜ヨ　ふ所ぐ今日和十さんが
お和さんのお宅ん歳さるを和ウ世く呉まさふ
程〜と都合〜て一人でそ出〜てお和さんは逢ひの沙
まふ〜ふべ例の所で此地人お出ごとひふふ高ひで逆対で
案まふ〜ふ　峯「然ウ往和十さんが此身が明日は往ふ
帰ふのを和門ふ所ケノウ　峯「イエ和十さん斗ぢゃ
ひつて牛さん案さんふ撫川のゆきんが和ウ世まふ〜ヨ

峯「ヲヤそれじやア御無事で居るのかへ　アヽまアどうぞ
私も早く御無事なお顔を見たいと根掘て聞く
其ま丶にしておくれと言内に峯次郎の身を案じ涙を浮べてゐる
ゆゑ伯様に久しく逢ひ國へ行て帰らず何心なく居るから
嬉しいと私まで嬉しく存じてもおもひまして
つれて居るのも只その頃の事で胸も悲しく峯
道の方で根で居る様な事をいひまして二三日も居るうち
住人行て居るのでござります」男は泣て耳
居る　アナタがひとりで御座る　ゆゑ居る一杯の酒
峯次郎は彦吉の船に乗りて一艘の舟で帰りて一艘の
舟にて彦吉の家にとまりて泣き中られて居る内に再会の
縁を悦びまするうちに早くもまた嫁入の様子で男の
「モシ若旦那　おまへ様に御出来なされませんかお知らせ申
ましたらお早く此度は取り成しをして下され
何卒こゝへお出で下さいまし　サア　お文も届けて
ましたと言て峯次郎傍に来るとよりて

おかあさと同じ姿の中おかあさも御一月を覚し峯次郎と
同時に起上り顔赤らめてさし俯き和らかなる身のそ
ぶり　京ハヨキ〳〵仏様ハ私ハ床〳〵　峯ハ弓ハ恥ずかしき姿ふお房
だと　京ハエお房さんとハエ　峯ハエ仏サエ　おかあさお房といふ名ふ
名を改と姿を見ることいふまでも　京ハヲヤ私ハおかあさんの　峯ハエ
京ハアノウお内儀さんふ戸川と姿を見ますとふいろいろふ神を
あてがひ〳〵床ふ赤ん坊〳〵顔を上げふ居ると〳〵ぶ仕所ふ名
ふ変ふ石橋の家と峯ふ藤店の美ふ富ふ〳〵美ふして
未銘舎ハ〳〵ふせざるうのうけまぶ峯次郎もお京ふも猶を
猶一ぶう仕所より別て路を急ぎ鎌倉へ帰ることける

○

〈夜見世の浴もまぶ空の青ふふうふ素の
移雲に移りおりふと美ふ其の輪乃
きぶきぬさ中略

峯ハハテナあの浮屠ハ仏ふざらう　孫ふーふ　秋ふあのごノウ
おかあさんトの人ども　おかあハ　俯向て　居るのゝ〳〵ふ〳〵ぶ眼ふ

涙をうかべ 忙然として 柱子の中に 峯入 ヲヤ お家さんまこの 京
をう男ひ出して 法のうハア 青森の 爺ぢさんが お家を
當地へ 登せて 来て 法うう 出に お出の 長の 絹糸でまご
法 法ごうひうう 案じて お屋のうえ ものうう お案るで
うひョ 来月ハ 古々を 時明て 仕方へ お出つごるサそして
お家ども 美男を 丈夫 ものして 伯父さんも 生産 仕
地ホ 湯居をうとのりて おようーどうう かーのうう 知ー
ふうふが 幸防して 法て おなるトのうまて お家ハ 峯次

帝の 島紙 情うち ものう 涙を 被ホ ねぐひつ 京 イ工
ナアニ 田舎の 爺 さんハ 来月 是非 當地へ 出て 来ると
義 ものうう そまん 仕 ひんどいうー ませんョ 峯 それ
でハ 仕ホ 行ど 法ごー 出ーひるのうえ 京 イ工 お家
さんとて 仕別 義人 お出 ものうう 暮ども でだりう
出生 ものう まん ものう 本宅の 伯父さんが 私を あの 別れ
義人 おようーの 帝。 逆法の 別 仕ハ 病身の 峯が 保
養湯 どうう 彼地へ 行 ひんど 伯でも 峯 次帝を 乳を 付て

ざいにしてくまろと在所作　まつさく　ろう　新八　まつく　藤
ろうて　ゆでも　心の　ちでくしとけ　おあきさんの　ゆ羽を　落至
上様と　男ひとんで　居ますのは　生も　おあきさん　ハ羽を
言つけても　お異　不義成　呂ごろて　ざろう　おを成
まいたろう　新八　文が　出ーう　ぐざろ　まいたヨ　行ゆで　まいん
田舎者で　気が　付ません　ろう　おあきさんの　おれは　入ら
ひまぐで　どざろ　まいたが　行く　卒　此　ろう　ま　獄　ろう
おて　まつく　を　教刑て　羽織　言分て　お異　成まーナト

在所は　居ろう　ま　第は　男ひ　深ろう　陸ろ　夫　授の　紋布　猶金ぬ
男の　心は　あらず　しても　の　形ろ　ろは　高家の　接　様も　乃ま
悪ぶ　様ろ　古々の　親も　心の　底は　ゆろ　て　ますき　鎌　金ぬ　頭
連ぐろ　藤の　宴　泊ーの　訳　家で　幾　度ろ　言ぬれど
猛ね　風俗　ろる　業　ぬ　第ぶ　様　田ろーく　て　今は　まつく　伯
父の　心も　古々の　父の　心は　金　疲ろ　陸　落ぐ　ハ　他　見ます
接　量ろく　ぬ日　今日　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
泊ぶ　くまるもの　心ぐろ　ろて　強ろ　ろる　産の　ぬぐ　ぬの

髪丼づくしにつとうけ髪の結ひ髪があつらへせるひが
付髪より始りて人ぶ高そうして流くちぎりのひらる
やうんと兼ねく展已ゐ二女までさるれぬ縁のありぞとく
初ねね如来が高義の時あハまと兼初しるぐらも相と
ちの房があるうへゐまと付如来と繋ぐうばとまらうみぐる
ゐ月見主来の安拡ありぐうと思寄に呉ろう家ぐ
頼ちまも猫息仕ぐうり始と生根を思ゐねど言ゐく
こまぐぞ生辰のりよ始まるものの思ひ涙の思を洗ふと

ゆ様ほの方へ三て行く折しも流るる墨の柄花のる
ゐ人父の思とゐよう初ねど後来のくく行ゆやひが変
ちて中ちも年齢四十の上を二ツ三ツも越らんと思ふ
尼一人髪次第髪が髪の頃ふうびし本戸の山家根の
下へ立休ちの時ちるを賀河待兵ちりけるが西ハちき
つゐ小止もう嚴ちぶ風情ちれバ雪次
第人着ちゐちのびぎ根側ちう頃を見越ちぐう表ちを
うけて始入まる峯モン法人ら存知ませんが時間ま

尼両舎して
峯次郎の
相を
觀る

新まるひ空のけしきでおぎわまに手所ハ彩の香ば
高ていけま甚ぬ仕方へ這入りてお体ゝ形成まゝト高ハ藤
らまて雅ゝ乳ゝ恍ば尼の形容何とゝ乳とき間
情のゝゝ顔のゝも白やうふ影ゝゝゝ梵天まぶまゝろ伽
羅の香ハ今も殘ゝて殘しげるゝび宮殿ゝりぬべき
人ゝりけきば雀位帝ハ座ゝ位を十きて内ゝう本ゝを
ひゝき峯ゝサア仕方へお出ゝまゝうぶ宜ごぎわ
まゝトやゝゝき詞ふ尼ハよろゝび座ふ入り模様ふ優を

うけて叮嚀に舎ゝ釈ゝ尼ゝこゝくゝハ法華ゝ村の
近所の者でごぶゝる三圍の稲荷行さゝく案内
のゝゝまゝゝの帰ゝ尼男ゝぬ所ふ兩ふ兩ふ長まゝ疑ゝ氏の
所を情深ひ御ふ便宜まゝて移ゝ月情深ゝる の位ゝ和ゝ
ゝを不顧仕宅をのゝゝまゝ佐野のゝゝゝの雲の
月を貪ゝと福ゝの遠ゝ遠ゝ市志ハ常世の君ふ御ゝる
情の雨の尼雪ゝゝ深ゝ御ゝ者ゝとぞんゝまゝゝゝ言迴
ゝゝる主御意ハ不穏の言葉ゝ似ゝれども貴様を

引ときふ主殿 崇ようす 校授ハ 対頭 新 他ようす
芝居のおすひき本下の 禅尼と尼そも 尼の
風情ふ 崇次第ハゆ〳〵ちもひ 烟草盆ごさ〳〵
煙よりとる 茅屋 釜の湯を吸 仕云 義の番 尼
いれて尼ふ 峯〳〵 サア お湯 湯を上ゆ 即 対 お茶を
あ〳〵ら〳〵 けまでも アそのあ〳〵を一 上 成そて
そこ 嬉 ご 崇 仕 仕方へ 寄て 両の 情 まで 寛と
あ〳〵〳〵 成 ま〳〵 ハ 崇 世の 対 ふ 茶ハ 故人

中村大蔵 勤さ 変下の 禅尼ようゆ
風俗 ご 定 て 常体の 尼法 作 ハ
きふ 奥ゆ〳〵 振ふ 朝ざトの 中 尼ハ 崇次第の
頼を 待 ち 極ふ 尼 モシ 貴君ハ 常 同 上ふ
ざ〳〵ふ ふ ふ ふ ハ お父 上 ふ で ご ふ
ふ ふ 同上 市 両人ト 言 〳〵 同 を 用 ふ を 打 て 仏 を 崇
尼 ふ 頼 ご ふ お 一 人 お 伯父 作 ふ で ご ふ ま せ ふ 尼 ハ
早 〳〵 中 用 仏 と 成 ま 〳〵 て 仏 幸 楽 ひ の ふ ひ 校 ふ 〳〵

お上兵衛様と言ふ御ごろく番次第　拳ハテ子それハ
男りも御ろくひるさ勿論親父ハ病気もゞ持病の
癪のゝごろう仏も手癖ふ苦労にさる程の尼ヘイモ
ゝとハ内ゆゑでござわ今日ハ表一の門ハ多ござわ
まゝ様ものゞ表ゑ入うまゝと本命の花ひ変ござわまゝ
手時ハ早く當時までの医者を止て裏の方の玄医師の
墨をお上げ兵衛様ゝ落もうまうひと内金渡ハござわ
まゝ、ね又伯父様の方ハ旗の路での内祝ござわ

まゝて手上日数十日の中ふ盗賊の内共祝ゞ参つてもも
お金にうゝう大変文をお取ひ兵衛様ハ三十里行の
行程を明後日あゝうゝ参ゞ支度を兵衛様
お迎ひ参ゝうひけまバ助ゝと手代ハ兵衛と
當村参ゞ稼ゝと内吉兵ふ内三人のお男のよも
内要ゞ参ゝふゞふ雑ゞ熟後様よりまゝて元人内
般若ふ参ゝまゝゝうゝ加ゝ左様兵衛様と言ゝ
尼の言葉親ハゝけまど親父と伯父の旗も病気も

さて嵩く変中〜あまだ空言とハ気ものもなくなぬ大
すの教人峯次郎ハ野河言葉もなくなりしが峯ハやられハ
思へばけるのうを国まるがお茶ハ何程してもなることを
知て知ハきなくなる寛ふ寿四郎人尼へなる程お茶ハ
も兵庫屋ときなくが兩舎うの内裏通〜とぞんじて私の
存ぜぬことをのけてお知らせ中だくりでどざるまた内舎だら
ちふ宮一ゆ中きなくう今年のお伝の中ふ表葉の様が
あうなるくうきなる〜て年成るゆがどざわきなくがられも

嫁生なうう宮まるこ内縁で義理ゆく彼氏と結んでお夜
成ても兩方がお離別きなくわたくしハ様ハなりきなくと
伝の屋ちで見貫〜神眼通の尼の一言ゆ〜もきなくぬ
様なれバ銀舎を嫌〜峯次郎　峯〜なるなどと母に覚の
なるお茶の都屋宮〜感伝いなる〜きなくがあ茶ハマア
伝の様ゆよお方でどざるきなくと尋ねゆ尼も嫁を連れ
尼〜おこ三平宮のお伝でハ女の母ハ母でなくらしへなる勝の奴ざ
と思〜〜きなくが伝の縁でなる人相の屋を始めきなくて

[illegible]年間[illegible]精を出して[illegible]業をあらため[illegible]覺えて一[illegible]
通りのことはかりしまつ[illegible]のの[illegible]の[illegible]ことを我
[illegible]女のいつぞや[illegible]の[illegible]と遂に[illegible]捨て[illegible]
[illegible]くと業[illegible]使の[illegible]
時[illegible]ありさまゆゑ[illegible]
おもへば[illegible]身の上[illegible]
の[illegible]の[illegible]
[illegible]